

ジョルジュ・ブラックによるヘシオドス『神統記』挿絵版画

—大戦間期におけるキュビズムと「秩序への回帰」—

杉本 渚（慶應義塾大学）

ジョルジュ・ブラック（1882-1963年）は1930年代前半、画商アンブロワーズ・ヴォラールに依頼され、古代ギリシアの詩人ヘシオドスの叙事詩『神統記』の挿絵となる一連のエッチング作品（以下『神統記』版画とする）を制作した。その後ヴォラールの不慮の死を経て、この挿絵本はエメ・マーグの尽力により1955年に出版された。

先行研究は、本作を主題・様式・技法におけるブラックの新たな挑戦として着目し、とりわけ同時代の古典主義回帰との関連、パブロ・ピカソのシュルレアリスム絵画からの影響といった点を指摘してきた。しかしながら、大戦間期（1919-1939年頃）のブラックの制作活動における本作の位置づけは未だ曖昧であり、特に第一次大戦後のキュビズムの展開という文脈の中で十分に検討されていない。そもそも従来の研究は、ブラックの「秩序への回帰」を、古典の参照に基づくキュビズム様式の再現的表現への揺り戻しと捉える傾向があり、戦後における画家のキュビズムの展開を積極的に分析していない。そこで本発表では、ブラックの「秩序への回帰」においてキュビズムが果たした役割を再考する。本作においてブラックが、戦前から続くキュビズムの探究の一環として、古代ギリシア神話を再解釈し、その結果として新しい形態を生み出したことを明らかにする。

まず本作の様式分析から、ブラックが古代ギリシア芸術を重要な着想源としながら、キュビズム的空間表現を追究したことを明らかにする。『神統記』版画の線描は、先行研究が指摘するように、古代の壺絵を想起させる。しかし同時に、遠近法を排除した空間や、量塊を減じ単純化した形態など、キュビズム的表現の存在を複数指摘できる。

また本作の主題分析からは、伝統的な挿絵の慣習に反し、物語の内容がほとんど反映されていないことが分かる。その代わりに、錯綜する曲線から浮上する形態によって、混沌からの世界の誕生という『神統記』主題の本質が暗示されている。これはすなわち、主題の逸話的内容を再現するのではなく、形態の再構築によって主題を比喩的に示そうとする、キュビズムの手法であると言える。『神統記』という主題には、画家のギリシア神話への関心と共に、キュビズムによる新しい形態・様式の生成という意味が込められていると解釈できる。

こうした具体的な作品分析と並行して、同時代の動向にも目を配りたい。特に1931年に出版されたオウィディウス著『変身物語』のためのピカソの挿絵版画と本作を比較する。さらに、大戦間期中にキュビズムと古代芸術を論じた美術批評家

クリスチャン・ゼルヴォスとカール・アインシュタインによる『神統記』版画の批評を検討する。

以上、『神統記』版画において、古代ギリシアへの関心とキュビズムが分かちがたく結びついていることが明らかになる。本作の制作を通じてブラックは、キュビズムの探究の過程にまた新たな形態を発見したのである。